

## Ⅳ Donald Beliveau ラバル大学教授（加）の 短期招請について

経営学部教授 横 田 澄 司

ドナルド・ベリボー教授は、カナダにおける代表的なマーケティング学者として評価されている。1986年6月29日に来日され同8月1日に帰国されたが、その間、精力的にわれわれと充実した時間を共に過ごされた。

ベリボー教授は、過去3回来日され—1回目は在日カナダ大使館から、2回目は東京大学経済学部によって、3回目は日本貿易振興会および日本生産性本部共催のシンポジウムに参加のためということで、日本には多くの友人、知人がおられ、日本での生活には慣れておられるように見受けられた。

ベリボー教授の研究上のユニークさは、現職がケベック州にあるラバル大学マーケティング学部長をしておられる立場と、ラバル大学を卒業後、フランスのINSEAD（ヨーロッパ経営大学院）で学ばれ、さらにUCLAで学位を取得されたという経歴によって特徴づけられる。つまり、アメリカのマーケティングが「実証的」かつ「実用的」である側面と、同時にケベック州に生活し、フランスで学ばれた「独自の視点」「独特の論理」に教授の業績は関係しているように思われる。

カナダは、アメリカとの経済関係が特に緊密であるが、同時にカナダは日本に対する貿易促進に強い関心を寄せている。なかでもカナダの1州であるケベックは、カナダにおいて独立国のような存在を意識し、独自の外交、経済政策を展開しているフランス語圏の州であることは周知のところである。ラバル大学は、そのケベック市に所在し、カナダでフランス語使用のもっとも歴史の古いもっとも伝統ある総合大学である。1985年には、「学位授与2000名計画を5カ年で達成しよう」と、努力している大学として有名で、全学部がそのための具体的教育プログラムを立案し、優秀な学生をアメリカか

らも集めている。

ところで今回で招請で行われたプレゼンテーションは3回で、第1回は、「小規模企業の国際化戦略を支援する公益部門の役割」と題して、7月15日（火）研究棟第1会議室で行われた。対象は、大学院生が中心であったが、他大学からも参加者がみられた（40名）。その内容とするところは、次のとおりである。

ケベック市では、フランスの影響が強く、家内工業が発達してきた中小企業が数多くみられる。これら企業が過去独自に積極的に海外での貿易活動を展開してきたが、それなりに限界が指摘される。しかしケベック州として独立した経済力を獲得するためには、たとえばケベック市のような公共機関が中心となって、どのようなマーケティング活動を推進することにより、これら中小企業を支援することが可能であるが、ペリボー先生は具体的な事例を紹介しつつわが国の中小企業の場合と異なり、若干の差異が指摘され、興味深く思われた。

第2回は、「カナダ・ケベック州における私企業の国際化意思決定プロセスに関する実証的研究」と題して、主として教員を対象に、7月28日（月）研究棟第3会議室で行われた。参加者は18名であった。

ケベック州に所在する民間企業の場合、過去に海外進出したり、外国企業との取引をする場合にきわめて主観的、観念的に行われてきたという。そこで実証的にデータを収集しその結果をいくつかのステップを経て、最終決定に至ることが好ましいと強調している。つまり、ステップの結果により、いくつかのパターンがあり、もっとも好ましい状態に評価された決定の場合、どの程度の規模の取引が許容されるか、またリスクはどうか、もっとも好ましくない場合は、どういう評価の場合で、断念すべき理由が明確にされる。ペリボー教授の実証的研究の結果から、一つの問題提起が行われている。

第3回目は、「日本—カナダ（ケベック州）間の貿易活性化に有効な市場分析」のテーマで、7月30日（水）、学部先生を中心に講義された。72名

の学生が集まり盛況であった。

この講義は、学部学生対象ということで教授はスライドを使用しつつ、平易な英語で行われた。また大別して、2つの観点から二国間の貿易活性化の必要性が強調された。2点とは、

(1)地理的条件の観点から、決して遠い関係ではないことが力説された。また貿易総額が、徐々に増加している現状と、日本が必要とするケベック州の豊富な天然資源について紹介された。

(2)市場分析の基準について説明が加えられ、日本、ケベック州相方にとって、貿易の拡大化がきわめて有益であること、また産業発展のためにも両国に必要であることが、具体例をもって説明された。

以上、講義内容の詳細については、国際交流センターから刊行される「基金事業招請外国人研究者講演録」を参照されたい。